

授業と「地域」がリンクするとき

高槻ジャズストリートと茨木のまちづくり

瀧 端 真理子 (人間学部心理学科)

1. はじめに

それは、いつのまにか始まっていた。私たちは、いつも特定の場所と、特定の時代に生きていて、場所や時代と無縁に過ごすわけにはいかない。けれども「地域」と言っても、その地域が、何を指すのかは自明ではない。モグラはトンネルを、行政上の境界に配慮して掘り進んだりもしない。授業にも穴が穿たれ、気がついたら「地域」と繋がっていたのである。

2. ジャズストリートとの出会い

「くらしと文化」(基本科目)の授業では、明治・大正・昭和初期の田園都市開発・住宅改良運動・生活改善運動をテーマに、私たちの暮らしのルーツを探っている。箕面有馬電気軌道の沿線開発の話から始まって、イギリスの田園都市運動、東京横浜電鉄による洗足・多摩川台地区の開発、平和記念東京博覧会や桜ヶ丘住宅改造博覧会、関東大震災後の同潤会アパートの建設などをトピック中心に扱っている。

根底にあるのは、どのようなまちづくりを行っていくのか、どのような生活をめざすのか、の追求である。少しだけマニアックなところが興味を引くのか、鉄道ファンなど、個性的な学生たちが受講してくれることがある。「あなたの町の鉄道事情」などは、毎年盛り上がるネタである。

さて、多くの学生たちにとっては、明治・大正・昭和は全部同じに見えるらしく、明治時代に洗濯機が普及していたなどと信じて疑わないなど、毎回の小レポートでは珍答が後を絶たない。何とか現代の学生たちの暮らしに結びつける工夫はないものか。

2000年5月の連休のこと、夕方、阪急高槻市駅前のバス停近くで、粋な音楽が流れていた。高槻ジャズストリートとの出会いである。当時の住友銀行高槻支店前に仮設ステージを組み、ジャズを演奏している。タダなのに、うまい……。バスを待つ間、思わず聞きほれてしまった。500円で売っているパンフを買って、家へ帰った。あれは何なんだろう。パンフを見て、地元のボランティア団体が仕掛け人だということが、おぼろげに分かった。

高槻を人の集う街にしていきたい、という願いをもとに、市民、地元商人、地元音楽家、地元

授業と「地域」がリンクするとき

文化人が発起し、1999年5月7日・8日に、初の「高槻ジャズストリート」が開かれたという。2000年度のパンフから引用しよう。

高槻の街に日本最高のジャズグループ『日野皓正クインテット』をはじめ、音楽専門誌で常に上位の人気と実力を誇る多数のミュージシャンを招聘し、駅前の広場や教会の中庭のほか、市内十数ヵ所の特設ステージやライブスポット、それに現代劇場大ホールなどでコンサートを展開し、それを広く市民に、すべて無料で提供するという、全国でも類を見ない市民参加型のイベントでした。

次の2001年は5月の連休を心待ちにし、「くらしと文化」の授業などの中で、勝手に、高槻ジャズストリートの宣伝をした。明治・大正期の小林一三や渋沢栄一らは、ユートピア的なまちづくりの理想を追求した。今、身近なところで、まちづくりの理想を追求しているのは、高槻ジャズストリートなのではないか。子どもを連れて聴きに行った城跡公園市民グラウンドなどでは、野外ステージでの演奏を、犬の散歩の途中のおじさんが聞き惚れていたりする。

私が勝手に作って配布した案内を見て、本当にジャズストリートにスタッフとして参加した学生がいた。社会学科の山本賢一君である。詳しい経緯は忘れてしまったが、山本君を通じて、ジャズストリートの仕掛け人(店)の一つでもあるJK(茨木店)のスタッフ、福永孝文さんが本学の卒業生(東洋文化学科1999年卒)であることが発覚した。在学中はまったく勉強しなかったという福永さんは、海外を旅したり、さまざまな経験を経たのちに、JKに就職したという。

誰でもタダでジャズを楽しめる高槻ジャズストリートは、市民ボランティアの力で成り立っている。でも、内情は、毎年ボランティア・スタッフのなり手不足で困っているという。山本君を介して、福永さんから依頼があり、本学の学生の中から、ボランティア・スタッフを募ることになった。2002年度には、授業内でこの年から無料となった高槻ジャズストリートの公式パンフを配布するとともに、「映画研究部シネマクリエイター」の学生たちに協力してもらい、ジャズストリートのビデオを撮ってもらった。また、2003年度の連休前には、福永さんを始めとするJKのスタッフ、山本君や、同じく社会学科の池田真由美さんなどのボランティア・スタッフ経験者、また、私の授業の受講生ではないが、本学学生の「なぎこさん」などが、「くらしと文化」の授業に飛び入りで参加してくれた。

一方、「社会教育課題研究」の授業では、板書をしていて振り返ったらみんな寝ていた！という状況を打破すべく、2002年度からは、グループ発表形態の試行錯誤を始めた。数回ごとに各自の興味関心に応じてフレキシブルにグループを作り(集団が苦手な学生は個人で課題をまとめ)、自分たちで調べて発表してもらうことにした。

私のそそのかしに乗って、「社会教育課題研究A」の一グループは連休の一日を高槻ジャズストリートの見学と取材に使い、授業内で報告をしてくれた。私が思うところの「社会教育実践現

場」の視察である。また、「社会教育課題研究B」2002年度受講生の中には、前年度の「くらしと文化」の受講生で、学内サークル「FACT」のメンバー岡田早世古さん、西岡絵里さん（いずれも心理学科）たちがおり、のちのち様々な機会に活躍してくれるようになる。「FACT」は“お絵描きサークル”というが、建築の好きな岡田さんたちは、サークル活動の一環として、茨木のタウンウォッチングをして、イラスト入りの冊子を作っていた。

3. 一本の電話から 茨木市都市計画課との出会い

2002年の暮れだっただろうか、突然、茨木市役所から電話がかかってきた。電話の主は都市計画課の岡田直司さんだった。中心市街地活性化検討委員会の委員にならないか、とのお誘いだった。「なぜ、私なんですか?」「滋賀県立大の近藤先生の紹介です」「分かりました。お引き受けしましょう。」

近藤隆二郎さんは、日本エコミュージアム研究会（JECOMS）で一緒にいるメンバーである。近藤さんは、工学部のご出身だが、とても変なこと（雨乞いとか、折りたたみの家とか）に興味を持っておられる。過年、近藤さんのコーディネートで、「平野まちぐるみ博物館」をめぐるって地元の方々のお話を伺ったり、逆に、私の段取りで「熊野フィールドミュージアム委員会」の方々と温泉合宿をしたり、と、お互いによく分からないままに、割と近いことに興味関心を示しているらしい。もっとも、大学のHPに、「県大で何をしたいか（研究、教育）」として、「世間のシンクタンクや企画会社が採算や安全性の視点から絶対に手を出さないような、アホな企画やイベントをプロデュースする集団を学生さんたちと共に先鋭的かつ前衛的につくってみたいです。そんな一方、地道に写し巡礼地や祭礼のフィールドワークなども地べたにはりついて継続していきたいです」と書かれる近藤さんは、永遠に私のお師匠さんであり続けるのかもしれない。

近藤さんの紹介なら大丈夫だろう、と思って、その長い名称の、「茨木市中心市街地活性化検討委員会」の一員となった。2003年1月のことである。都市計画課の岡田さんは、大学で造園を専攻したコンサル出身の方で、これまでのお役人のイメージを一新する人だった。岡田さんたちが求めているのは、私個人ではなく、私のうしろに存在する追手門の学生6300名であることは、すぐに理解できた。

茨木のまちづくりに関わることはむづかしい……。追手門の学生たちは、スクールバスのピストン輸送で茨木の町中を歩くことも少なく、JR茨木駅や阪急茨木市駅に吸い込まれていく。私自身、隣の高槻市に住みながら、茨木市のことは何も知らないに等しかった。

ところで、1998年7月に「中心市街地における市街地の整備改善及び商業等の活性化の一体的推進に関する法律（略称：中心市街地整備改善活性化法）」が施行され、中心市街地の活性化に取り組む全国の市町村に対して、関係1府6省1庁（経済産業省・国土交通省・総務省・農林水産省・警察庁・文部科学省・厚生労働省・内閣府）からの支援措置が実施されている。

授業と「地域」がリンクするとき

関係府省庁の統一的窓口である「中心市街地活性化推進室」のHPでは、この法律の特徴を、「市街地の整備改善に関する事業と商業等の活性化に関する事業を車の両輪として、民間活力の活用を図りながら、ハード・ソフトにわたる各種施策を総合的かつ一体的に推進します」と記している。市町村は、国の基本方針などをふまえ、一定の条件を満たす区域を「中心市街地」として定めるとともに、中心市街地の活性化のための方針や目標、実施する事業に関する基本的な事項等を内容とする「基本計画」を作成する。市町村、民間事業者等は、「基本計画」に基づいて、土地区画整理事業、市街地再開発事業、道路、駐車場、公園等の都市基盤施設整備など「市街地の整備改善に関する事業」、魅力ある商業集積の形成、都市型新事業の立地促進など「商業等の活性化に関する事業」、その他必要性に応じて公共交通の利便性向上、電気通信の高度化等に関する事業等を一体的に推進することになる。ⁱⁱ

私が参加することになった、「茨木市中心市街地活性化検討委員会」は、この「基本計画」等の検討を行う組織なのであった。茨木市は、すでに2001年度から該当地域の基礎調査を行いⁱⁱⁱ、庁内連絡会議を立ち上げていた。また一般公募市民・商工会議所・庁内関係課からの参加者によって、「茨木市中心市街地の魅力づくりを考えるワークショップ」、2002年度には「茨木市中心市街地のこれからを考えるワークショップ」を行ってきていた。^{iv}

4．市役所からの出前講座と「ワークショップ」の怪

2003年7月8日には、市役所の岡田さんからの働きかけもあり、「くらしと文化」の特別講義として「いばらきのまちづくり」という出前講座を招請した。講師には、岡田さんの他に、当時ワークショップ参加者を中心に計画中だった、仮称＜交流サロン＞の世話人である土方慶之さん、また、検討委員会でご一緒していたNPO法人まちづくりメディア理事長の田峰泰久さんにお越しいただき、都市計画課の仕事や、「まちを元気にする取り組み」、仮称＜交流サロン＞やケーブルテレビについてのお話をいただいた。

この公開授業には、経営学科の丸山智裕君がゼミの地代先生から、「商店街の空き店舗を利用するベンチャービジネスプランがあるから・・・」とそそのかされて参加していた。公開授業の終了後、岡田さん、土方さん、田峰さんに私の研究室に立ち寄っていただき、丸山君も同席していた。この日の夜、仮称＜交流サロン＞開設のための会議をするから、と岡田さんたちに誘われ、丸山君はこの会議に参加することになった。

仮称＜交流サロン＞は、茨木市役所、茨木商工会議所の積極的支援を受け、もと米穀店の空き店舗（茨木市本町）を改装し、＜茨木交流倶楽部＞として立ち上げられることになった。その、空き店舗で、蚊に刺されつつ会議は開かれたのだそうだが、ここから丸山君は、＜茨木交流倶楽部＞の底なし沼に引き込まれることになった。市役所の岡田さんたちに連れられ、夏休み期間中に豊中市新千里東町の「ひがしまち街角広場」へ視察に行った丸山君は、空き店舗のペンキ塗り

[] 体験型学習の実践

をはじめとする諸作業を手伝うことになった。〈茨木交流倶楽部〉は、茨木商工会議所や、これまでの市役所主催市民・商工者ワークショップ参加者の方々を中心に運営が行われている。年末の交流倶楽部改装のためのペンキ塗りには、「FACT」の岡田早世古さんと西岡絵里さんも協力した。

ところで、この数年、私は「ワークショップ」というものに、強い違和感を抱いていた。とある会合で、はじめて遭遇したワークショップ（ポストイットと模造紙と色つきマジック、と、旗揚げアンケート）の体験があまりに不快だったためである。不快ながらワークショップの手伝いなどをさせられるうち、ぼつぼつと、「ワークショップ」関連の文献などを集め始めた。文献を読んだり関係者の話を聞く中で、「ワークショップ」というのは、あくまで手段であり、目的ではないこと、また、ワークショップの捉え方や使い方も、またその起源すら、さまざまであることがほの見えてきた。

2003年度秋学期の「社会教育課題研究A」の授業では、中野民夫『ワークショップ 新しい学びと創造の場』（岩波新書 2001）を全員で読むことにした。受講生たちには、私が「ワークショップ」に対して抱く違和感を先に伝え、この本を読んで、ワークショップのどこが気持ち悪いのか、あるいは楽しいと感じるのか、考えてほしい旨伝えた。また、導入編として、近藤卓「ワークショップ 放任され、既成事実化した作法」を皆で読んだ。近藤は次のように記している。

近年におけるワークショップにおいて住民参加は無視できない。住民参加型プロジェクトで公開されているホームページをいくつか見てみるとワークショップのねらい、方針、進め方などが掲載されている。ハルプリンの思想に基づき相互理解や多様な人間関係作りも謳われている。しかし、現実的に村を基盤とした日本人社会において相互理解と人間関係は比較的得意としているところではないだろうか。主体性の定着しにくい国民性、そしてすでに成立しているある程度の相互理解と人間関係、この状況においてワークショップという手法は本当に有効に働くのだろうか。……実は、住民参加型のワークショップは行政からの打診から始まることが多い。ここですでに住民側の主体性が疑問として残る。参加＝主体性にはならない。

さて、市役所の岡田さんたちには、常々、私自身のまちづくり系ワークショップに対する違和感、について話してきた。その話を踏まえた上で（？）、9月には岡田さんが、追手門でのワークショップ開催を申し込んでこられた。これまでの市役所主催ワークショップでは、若者の参加が少ないなど、参加者の属性に偏りがあったためである。

10月6日、「社会教育課題研究A・B」の両授業時間で、学生限定ワークショップを開催することになった。授業内では中野民夫の本を読み始めていたが、当の学生たちは、そもそもワーク

ショップの経験がなく、まずは実体験してもらおう狙いもあった。準備はすべて岡田さんたち市役所スタッフにお任せすることにした。

当日は市役所から大塚さん、岡田さん、松本さんの3人が、私の予想通り、模造紙とポストイットと、カラマジックをもって来て下さった。「学生限定ワークショップ」には、阪大の学生2名も参加してくれ、また受講生以外にも学内から参加者を募った。

5. 学生たちの感想

「社会教育課題研究A」のクラスでは、中野民夫『ワークショップ』1冊を担当を決め、毎回2～3人ずつがレジュメを作って内容のまとめと紹介、感想を発表し、ディスカッションするという形態をとっていた。茨木市からの出張ワークショップの経験を経て、学生たちが作ったレジュメから本の感想部分を一部抜粋してみよう。

読めば読むほど宗教的なのというか、何かに洗脳されそうな文章だった。先日、ワークショップというものがどういうものか、わからないままワークショップを体験してみて、おもしろかったというのが率直な感想であるが、自分がワークショップに向いているとは思わなかった。なぜなら、協調性にかけているからである。面と向かい合って話すのを得意としない、まちについてよく知らないなど理由はある。

10月27日 アジア文化学科3回生・今堀弓子(担当pp.17-39.)

この部分を読んで、ワークショップがいろんな分野で、様々な形で取り入れられて、広がりがつつあることが分かった。講師の講義を一方的に聴くのではなく、体験的な学び方で人材を育成していく企業が多くなっているようだが、一方的に聴くよりも、体験的なほうが身にもつきやすいと思う。

この部分で一番気になったのは、レイチェル・カーソンの「知ることは感じることの半分も重要ではない」という言葉だ。感じることは大切だとは思いますが、知ることもおろそかにはできないと思う。ある程度知識がないと、感じたことを自分のものとするのができないとおもう。また、感じることにのみ重点をおいて、知るという意識や欲求がなければ、感じることもできないのではないかと思う。「知る」と「感じる」が対等の位置にたっていないからではないかとは私は思った。

10月27日 心理学科2回生・吉川真奈(担当pp.40-64.)

表2-1より。

このプログラムを見ると、全体のバランスを重視していると感じる。文中や表にもあるよ

[] 体験型学習の実践

うに、「起承転結」や「つかみ・本体・まとめ」がしっかりしている。聞く、話す、感じる、考える、など様々な形を取り入れている。グループを固定せず、色々な大きさにすることによって、個を感じることに、それを違った複数の人で話し合うことによってより多くの人の考えを聞くことができる。

また、この様な大勢の人数で行われる活動で重要になってくるのが、ファシリテーターの存在である。ファシリテーターの進行方法によって、そのワークショップが良くも悪くもなると言っても過言ではない。 10月27日 経済学科3回生・山本英貴(担当pp.65-94.)

今回この部分をしてみて何が一番言いたいのかな?と考えた時、ようするにこの複雑な現代社会に生きる我々にとって一度ゆっくりと出来る時間を作って「自分」をもう一度探す事ではないかと思いました。その手助けとしてこのようなワークショップがある、と言うことだと思います。精神とか宗教についてはあんまりよく解りませんが、普段の日常生活において私達はもっと敏感に物事を感じて生活をするともまた違った世界が見えてくるのかもしれないと感じました。 11月17日 社会学科3回生・山下宗一郎(担当pp.113-129.)

この8ページを読んでみて、「今の社会が間違っている」というわけでも、「今の社会が起きている」というわけでもないと思った。今の社会は間違いなく「WIN / LOSE」型だと思う。そもそもそれが始まったのは、不景気からである。会社は、「WIN」であるために社員をリストラする。これが「LOSE」型である。では、どうすれば「WIN / WIN」になるのだろうか。そもそも「WIN / LOSE」形式はどこから作られたものなのだろうか。そして、「WIN / LOSE」の世界をどうすればなくすることができるのだろうか。

本を読んで、それは人々の気持ちだと思った。それにより、「WIN / WIN」型の世界が出来上がっていくのかなと思った。それにはまず、人との助け合いが大切だと思う。

11月17日 経営学科2回生・浅井稔之(担当pp.151-159.)

自己啓発セミナーと違いをあげてあったけれど、ワークショップもそのとおりではないか、と感じた。どういうふうに繕っても、隔離して非日常のなかで今までその人が持っていなかった考え方を持たせるようにするのだから。

ワークショップが一番いいような言い方をしているように感じるので、ワークショップの宣伝をしているように感じた。ワークショップのやろうとしている目標が大きすぎるような気がする。 11月17日 心理学科4回生・神田聡子(担当pp.159-176.)

企業の研修が始まっていて参加しているが、「もしかしたらこの本、読んでんちゃうん??」と思うぐらい、本の内容を実践した研修内容であるのに驚いた。それは、1の「場

授業と「地域」がリンクするとき

づくり」から2の「導入」、3の「本体」、4の「まとめ」というふうに研修内容が本の内容を十分に含んで進行されているからである。また7のファシリテーションのポイントもほとんどその通りに、会社の人がこなしていた。

なので、この章に書かれていたことは、会議や討論をもし、自分が司会となって行うときには、すごく参考になるなあと考えた。

12月1日 心理学科4回生・川口範晃(担当pp.177-197.)

今回学んだワークショップにおいて、やり方や考え方というのはとてもいいものだなと思った。だがこのままではワークショップは変わっていけないと思った。人にはいろいろな考えの人がいるように、ワークショップをするうえで、すべてがこんなにうまくいくとは思えない。中にはそれがにがてな人がいるだろうし、話ずきな人というのはやはり、そのグループのなかで一人つぶばしっていってしまい周りはそれに合わせるだけという感じになってしまうと思うからだ。

このようなことがないためにもワークショップというものをもっとみんながみじかなものとして感じてもらえるようにして、やり方などをもう一度考え直して行くべきではないかと思った。

12月1日 経営学科2回生・木原裕亮(担当pp.197-223.)

宗教学を学んだ後で博報堂に入社した中野民夫の本の内容は、環境教育、それもディーブエコロジーと企業内グループワークを同時に論じる奇妙な本であったが、新書本という性格上、学生に買わずには安価で、また読むのも平易な具体的な事例中心の本であり、実質5回の授業で読み終わることが出来た。途中、第2部に出てきた「大ウソつき大会」をやりたい、と3回生の伊藤やちほさん(アジア文化学科)が言い出し、彼女の企画で11月10日に実行する、という思わぬ展開もあった。

その後、茨木市の岡田さんからの働きかけがあり、「社会教育課題研究A」の受講生から、伊藤さん、今堀さんの2人、及び「大ウソつき大会」に飛び入り参加してくれた男子学生2名が、11月20日から始まった茨木市主催の「茨木市中心市街地を元気にするワークショップ」に参加することとなった。

6. 茨木市中心市街地空き店舗実態調査

12月末に市役所の岡田さんから、メールが届いた。先述の委員会で一緒にいる、商工会議所事務局長の木村さんが、商店街の空き店舗調査を大学生にアルバイトで依頼したい、と相談されているという朗報である。市役所側の発案で、中心市街地活性化検討委員会のメンバーに、コンサルタントと市役所職員を加えた形で、2003年秋から、不定期・自由参加の研究会が市役

[] 体験型学習の実践

所を会場に開催され、委員会で作成した「茨木市中心市街地活性化基本構想(案)」をもとに、「基本計画」をつくる作業が継続されている。

2004年1月7日の研究会で、木村さんと調査内容や雇用条件を相談し、人選や内容のこまかい詰めは、経営学科の丸山智裕君と、アジア文化学科の伊藤やちほさんをお願いすることにした。博物館実習・社会教育課題研究の授業の受講生を中心に、追手門の学生・大学院生・研究生計18名が2月6日・7日の2日間、空き店舗実態調査を行った。

調査は、2人一組になって、受け持ち地区の住宅地図を持ち、商店街の中の各店舗の業種を調査し、とくに空き店舗のあった場合には調査表に従って空き店舗の情報を収集し、写真を撮る、という流れである。現地調査終了後、学生たちは「茨木交流倶楽部」に集まり、調査表への現況写真の貼り付け、などの整理作業を行った。

木村さんとは「茨木交流倶楽部」の運営で旧知の間柄である丸山智裕君のおかげで、学年末・入試の繁忙期にも関わらず、私はほとんど何もせずに、無事、アルバイトの仲介役をこなすことができた。調査当日は、たいへん寒い2日間であったが、商工会議所からの厚遇もあり、勤務した学生たちの中には、またこんなバイトがあったらぜひ紹介してください、とわざわざ研究室まで訪ねてきたものもあった。学生たちが、「茨木交流倶楽部」に実際に足を運ぶ、よい機会にもなったのではないかと思う。

7. おまけ的波及効果

「授業で文献を読むのはいやだ」という授業内問題学生丸山智裕君のせいで、秋学期の「社会教育課題研究B」の授業の方は、もろもろの相談事の場と化した。受講生の小松清二郎君(経済学科3回生)は、「茨木交流倶楽部」を夜は「雀荘」にできないのか、と問い出した。今のところ、交流倶楽部は平日AM11:00～PM4:00、祝日AM12:00～PM4:00のみオープンしている。小松君は、夕方から夜の時間もつたいないので、雀荘がダメなら、せめて自習スペースとかでオープンできないのか、と主張、丸山君の勧めで交流倶楽部の定例会にも参加したが、小松案は今のところ実現していない。また、同じく受講生の榎尾麻弓さん(心理学科2回生)は新聞部部員であり、丸山君に「茨木交流倶楽部」の取材を申し込んでいた。

小松君の雀荘案は、市役所で開催されている研究会の席上でも話題に上げたところ、「今の学生でもマージャンするのか!」などと、けっこう受けネタとなった。市職員、コンサルのみなさん、活性化検討委員会のメンバーのみなさん、まじめなおトナの方々が多く、みなさんが期待する学生・若者像と、私が日頃接している大学生像のギャップを埋めるのは、なかなか大変な作業である。それに、どんなまちをめざすのか、についても、みなさんまじめな見解を示す。

基本構想をつくるプロセスで、委員がそれぞれキーワードを考える、というノルマがあった。私は、かねてからの不満を解消すべく「大人がデートできるまち」というキーワードを提案した。

授業と「地域」がリンクするとき

なぜか、この案はあっさり通ってしまったのだが、どなたかが、「老夫婦が腕組んで歩けるまち、子供を預けてゆっくりデートできるまち」という解説をつけて下さった。この意識のギャップもいかにして埋めるのか、なかなか難問である。

さて、2月10日には、美術部のメンバー3人が、自作の陶器と油絵を交流倶楽部に運び込み、展示作業を行なった。彼、彼女らのしごくまじめできれいな作品を見ているうち、また、ここは東京ではなく茨木市なのだ、と思った。いくら本で、ダンボール箱に入って歩行者の反応を窺うプロジェクトや、自販機ハウスの実験など、首都圏発の情報に触れてみても、茨木市では今のところ「ありえない」と思ってしまう。

この原稿を書きながら、高槻ジャズストリートでの「なぎこさん」のことや、福永さんの卒業年度を確かめるべく、JK（茨木店）へ電話をした。久々にお話しした福永さんから、「近々、お目にかかれますね」と言われ、しばしきょんとしていると、JKに市民ワークショップのメンバーの方々が訪ねてこられ、3月20日に開催される「中心市街地活性化フォーラム」の打ち上げ会場（＝市民が提案した各種イベントのゴール地点）として、JKが使われるとのこと。

高槻ジャズストリートから掘り始めたモグラの穴は、やっとここで、「いばらきのまちづくり」の穴と交錯することとなった。この穴は、次はどこへ向っていくのであろうか……。

【謝辞】本稿の作成に当っては、茨木市都市整備部都市計画課、市民生活部商工労政課、茨木商工会議所のみなさんにお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

i 蓑輪裕之「高槻をジャズのあふれる街にしたい…市民の夢をカタチにするために」有限会社シティライフNEW編集『高槻Jazz Street 2000 公式ガイドブック』高槻ジャズストリート実行委員会発行、2000年、3 - 4頁。

ii 「中心市街地活性化推進室へようこそ」<http://chushinshigaichi-go.jp/index.htm>

iii 茨木市都市整備部都市計画課『茨木市中心市街地活性化に係る基礎条件調査報告書』2002年。

iv 茨木市都市整備部都市計画課『茨木市中心市街地の魅力づくりを考えるワークショップ記録集』2002年。

v 近藤卓「ワークショップ 放任され、既成事実化した作法」landscape network901編『ランドスケープ批評宣言』INAX出版、2002年、164 - 167頁。

vi 茨木市中心市街地活性化検討委員会『茨木市中心市街地活性化基本構想（案）』2003年。

<http://www.city.ibaraki.osaka.jp/office/toshi/tokei-news/kihonnkousou/kousou-001.pdf>

vii 川俣正『アートレス マイノリティとしての現代美術』フィルムアート社、2001年。

木幡和江「Artist in the Street」東京芸術大学先端芸術表現科『先端芸術宣言！』岩波書店、2003年。